

# 少年家族のストレングスとそのエンパワメント

西田 鶴奈

## 1. 研究の背景

近年、少年によるショッキングな事件が多く報道されているが、その中で少年の家族や成育歴に問題は無かったのかという分析が多くある。筆者も、少年は加害者の面を持ちながらも家族から愛されなかった被害者であると考え「その一番の原因は家族にあるに違いない」と思っていた。

しかし、卒論のテーマ設定をきっかけとして非行少年の親の会に参加させていただき、今まで抱いていた少年家族へのイメージが180度変わってしまった。今まで誤解と偏見の目で少年家族を見ていたことに気づかされ、母親達の語る言葉からたくさんのものを学ぶことが出来た。もっと話を聞いてみたい、その底知れぬパワーと子どもへの愛情はどのようにして生まれているのかを知りたい、と思い本研究のテーマとした。

## 2. 文献の概観

### (1) 少年家族への支援に関する研究の到達点

少年家族は「原因」と見られがちであるが、生島(2002)は、少年家族を“立ち直りのサポート組織”と見ており、「家族への援助によってその適応力が伸長すると、本人自身の心身も安定し、社会適応力も向上して再非行が抑止される」と述べている。家族がもつ機能を活かすことで少年の更生につながるとし、家族支援を行う必要性が明らかになった。また、学校を始めとする各機関では家族への支援を心掛けていることが分かった。

### (2) 当事者に関する調査の到達点

非行克服支援センター(2012)が非行少年の親を対象に行った調査では、少年の問題行動に

対して疲弊しているのは、学校や地域だけではなく家族も同じであることが明らかになった。さらに、近所や親戚の目、学校の対応など家族は少年以外の事柄にも神経をすり減らし、自分達の育て方を責め続けることにより自身の健康状態も損ねてしまっている状態であることが分かった。

## 3. 本研究で明らかにしたいこと

先述の内容をふまえると、家族は少年の問題行動の対応に追われるだけでなく、家族間や親戚、学校など少年を取り巻く様々な環境の中での関わりに苦勞していることが分かった。しかし、非行少年の親への研究は少ない。支援者の経験に基づく先行研究は参考になるが、苦勞してきた家族の話を傾聴し、他機関と連携し情報を収集することの重要性を述べるに留まっており、今後非行少年の家族支援に関する研究分野では、実際の親の声に基づいた具体的な支援についての研究が進められる必要があるのではないかと考える。

今までの研究では家族システムの中での悪循環に主眼が置かれ、家族の強みや能力という視点は欠けていたように感じられる。本研究では非行行為が始まってからの家族の状況や様々な人たちとの関わり、そして非行行為収束後の少年の親としての心境を知る事で、非行という嵐を乗り越えてきた家族のストレングスとそのエンパワメントについて明らかにしたい。

## 4. 方法

1) 調査対象：非行歴のある子どもを持つ母親5名(少年：男子3名、女子2名)。いずれ

も子どもたちの非行行為は数年～数十年前に落ち着いており、調査が現在の親子関係に影響を及ぼさないよう乾いた事例を用いた。

- 2) 調査方法：調査は1人あたり1時間～3時間の半構造化面接を行った。
- 3) 調査項目：質問内容については、非行行為が始まる前、非行行為開始期、誰にも相談出来ず悩んでいた時期、非行行為収束後の4つの時期に分けて以下の15項目の質問をした。
  1. 家族構成を教えてください。
  2. 非行行為が始まる前のご家族の様子を教えてください。
  3. お子さんの非行が始まったのはいつ頃ですか。現在お子さんはおいくつですか。
  4. 非行を知ったとき、どのように感じましたか。また、家族はどのように感じていましたか。
  5. 非行行為が始まってからのご家族の様子を教えてください。
  6. 非行行為が始まってから、一番大変だったことはなんですか。
  7. 家族以外で誰かに相談をしましたか。相談をした場合、非行が始まって（分かって）からどれくらい経った時ですか。
  8. 相談に踏み切るまでに悩んだり迷ったりしたことはありますか。悩み・迷いの原因はなんですか。
  9. 誰にも相談出来ず悩んでいる時期に支えとなったものは何かありますか。
  10. 誰にも相談出来ず、悩んでいた時期のご家族の様子を教えてください。
  11. どうして相談してみようと思ったのですか。
  12. 実際相談をしてみて、良かったこと、悪かったことを教えてください。
  13. 非行行為がおさまってからのご家族の様子を教えてください。
  14. 今振り返ってみて、お子さんの非行をどのように捉えていますか。
  15. 非行をしている少年やその家族に対して、

どのような支援（予防策も含めて）が必要だと感じますか。特に、家族が誰にも相談出来ずに悩んでいる時期に周りの人（学校、近所の人、友人等）たちはどのように関わるのが良いと思いますか。

- 4) 調査項目の分析方法：インタビューの音声を文字起こしし、そこからローデータを抽出して、5名分をまとめてKJ法によるカテゴリ分析を行った。

## 5. 結果・考察

得られた結果を、①非行行為を知った時、②地域での生活、③相談する上での迷い、④母の心身のスパイラル、⑤母親の気持ち、⑥夫の思い、⑦子どもの行動の変化、⑧子どもの性格、⑨子育てを振り返って、⑩プラスの出来事、⑪親の成育歴、⑫支援者に求めること、⑬親支援の概念図、⑭家族以外の相談先、⑮良かったこと・悪かったこと、⑯1番大変だったこと、⑰支えとなったもの、⑱家族の移り変わり、⑲子ども気持ち、⑳非行行為をどのように捉えているか、の20の観点から表や図にまとめた。字数の関係上図表は割愛させていただき、少年の親支援に関する考察のみ述べる。

### ①支援者に求めること

筆者は、非行少年の親がこんなに苦しんでいるということを知った時から「なぜ早く相談に行かないのか」という疑問があった。しかし、今回の調査で子どもの非行行為が分かってからすぐに絶望的な状態になるケースばかりではなく、ある種の段階を経ていくのだということが明らかになった。非行とは言えないだろうという段階から、周りからの傷つきを恐れて殻に閉じこもる段階、そして閉じこもっていらなくなって外に助けを求めるという3段階である。全ての人にこの段階が当てはまるわけではないが、自ら相談機関に向かうような場合、このような段階を追って相談に来るケースが多いのではないだろうか。

そして、助けを求めるようにして相談にきた

親が支援者に求めることを分類すると、1. 受容、2. 共感、3. 傾聴、4. 信頼関係、5. 個別性、6. 伴走者、7. 具体性、8. 最初の1人 の8つの項目があがった。様々な環境の中で多くの傷つき体験をしている保護者は、まず自分を分かってくれる存在、否定しないで受け止めてくれる存在を求めている。また、インタビューの中にもあったように、分かろうとしている態度、一緒に問題を解決したいという思いが伝わるか伝わらないかが重要なポイントであるようだ。具体的なアドバイスが出来なくても、思いに共感することが出来なくても、親を偏見の目で見るとはなく寄り添っていく支援が有効的だと考える。

## ②親へのエンパワメント

筆者は、インタビューを行う中で「母親の強さ」「親の愛」「家族の持つ力」を何度も感じる事が出来た。今まで非行少年の家族は“問題を抱えた家族”と見なされていたが、問題だらけであったとしても、問題しか持っていない家族ではないということが明らかになった。Bさんの「一番子どものことを分かっているのは親(B131)」「専門家と言われている人が何時間かあるいは10分か20分の検査や調査をして、その子やその親子の関係っていうのを見るよりは、親が子どもを見ていく、あるいは子どもが親を見ていくって方がずっと詳しいし、分かっている(B132)」という発言で、親が持つ力、親だからこそ持つストレングスをはっきり知ることが出来た。また、Bさんは「大半の親はみんな人間として普通の能力は持っているの、その自信を失わせないこと(B136)」「あなたが考えている方法が1番正しいんだよ世間が何て言おうと。そういう(本来の親が持っている)力を認識してもらおう(B137)」と語っており、親の持つ強みをエンパワメントする方法や必要性が分かった。そこには、目の前にいる親は疲弊しきって力が無いように見えるが、実は親が子どもにかける愛情は何よりも大きな力を発揮することを信じる必要があるのである。親をエンパワメントすることが、親の自信につなが

り親の変化へとつながる。親の行動を変えるためには、まず親が持っているストレングスを信じ、それをエンパワメントすることが大切なのである。

## 6. 総合考察

### 1) 親の持つストレングスとは何か

インタビューの中で、「親の持つ力は、誰よりも子どものことを分かっていること」という意見があったが、筆者がインタビューや親の会での活動を通して一番感じた親の持つストレングスは「誰よりも子どものことを思っている」という点である。問題を抱えた家族として少年家族を見ていた筆者にとって、それは新鮮な発見であった。

自分の世間体を考えて子どもの気持ちに気づいていないという部分は見られたが、どれだけ暴言を吐かれたとしても、帰ってこなかったとしても、暴力を振るわれたとしても、見捨てることなく、追いかけて続け、悩み続け、思い続けたその力は決して専門職には持つことが出来ない親自身の強みではなのではないだろうか。

また、インタビューをした方全員から子どもへの感謝や謝罪の言葉があったという点も、筆者の常識を超えたものであり、衝撃を受けた。あれほど悩まされ、傷つけられた存在に対して、どうして感謝することが出来るのだろうか。それは、お互い体当たりで向き合い続けた末に、「私を見て」という子どもの純粋な思いを知ることが出来たからではないかと筆者は考えている。これほどまでに全力でぶつかりあえるのも、親・家族が持つストレングスなのではないだろうか。

### 2) そのエンパワメント方法としてどのようなはたらきかけが適切なのか

少年家族への支援は、家族システムに変化をもたらすため、問題となっている行動(親の過干渉等)を改善することが重要である。しかし実際には、その行為者は行動のまずさに気づ

いておらず、むしろはたらきかけなければと一生懸命になっている。そしてその背景には子どもを元に戻したいという切なる思いがある。この場合、行為者（今回の場合は母親）のストレングスに目を向けて、そこをエンパワメントしていく支援が必要だと考える。そうすることによって、母親は自身の問題行動に気づき自ら行動を変えることが出来るだろう。

その方法として、まず非難せずに母親の気持ちを受け止め、認めていくことが必要である。子どものためにという動機で行動しているので、行動は良くなかったとしても、その動機に対して労いや評価を示すことで母親は「分かってもらえた」と感じる事が出来る。さらに、母親は「とにかく元に戻したい」と必死になるあまり、焦りから即効性を求めているが、その点に関しては、具体的な関わり方を示し、「すぐに元に戻ることはない」という事実を伝える

べきであるとする。その際、「子どものことをこんなに思っているなんて、あなたは素敵な母親よ」など、母親自身のストレングスに気づいてもらえるような言葉かけが有効であり、裏目に出てしまっているような行為でも、具体的に正しい方法を提示することでどうしたら良いのかという方法が分かるため、適切な行動を実行しやすくなる。

子どもの様子が変わるまでの期間は辛くもどかしい時期だが、「子どものことを色んな面から見られるようになったじゃない」「笑顔が増えたんじゃない」など、母親自身の成長をフィードバックすることで母親に寄り添うことが出来る。母親は一人では立ってられない存在かもしれないが、家族や支援者の力を借りれば、誰よりも子ども思っているキーマンの役割を担うことが出来るとする。